の１頭に基いてWalkerがCeylonからAnthribius apicalisとして記載された種（Ann. Nat. Hist.（3）iii, P.62, 1859）としてPhloeobius apicalisとして記録された（Trans. Ent. Soc. London, 1891：319, 1891），産地は書いておられないが大変状態の悪い標本で触角も欠くと記されている。割合大きくて仲々はっきりした斑紋を有するヒゲナガゾウムシなのだが余り産地が知られていない。勿論兵庫県からの記録も無かった。１９８２年７月２８日神戸市の烏原貯水池畔柵の柱上に静止している１♂（体長口吻を入れて１４㎜）を採集したので記録しておきたい。

この様な大形種が今まで県下から知られていなかったことは不思議である。尚本種と同定したのは森本博士の論文によった（Esakia, №14, P.6−8, 1979）。

またこのPhloeobius 属の日本産ヒゲナガゾウムシは現在この種を含めて４種が知られているが兵庫県下にはセマルヒゲナガゾウムシ P. gibbosus Roelof, 1879 を産するだけである。こちらも余り県下での産が知られていない。一応既知産地を記しておく。川西市大和，笹部〔仲田，１９７８〕，川辺郡猪名川町三草山麓（１♂ ５−Ⅴ11−１９８０，T. Takahashi leg.），多紀郡〔鈴木，１９６１〕，氷上郡〔山本，１９５８〕，城崎郡三川山〔高橋，１９８１〕，京都，大阪から記録のあるP. stenus Jordan,1923の方はまだ県下から見つかっていない。他の１種は九州に分布している種である（P. mimes Sharp, 1891）。

神戸産珍稀なコガネムシ数種の記録
（兵庫県甲虫相資料・126）

高　橋　寿　郎

最近須磨区在住の田中正浩氏が神戸市内で採集されたコガネムシ類を持参来宅同定を求められた。拝見した所いづれも神戸産としては珍しいもの否兵庫県下全般にとっても珍しいもの，また中には兵庫県初記録種もふくまれていた。そこでこれ等のコガネムシの記録を此処に発表させて頂き度いと思う。貴重な標本を検する機会を与えて下さり，発表を赦された田中正浩氏の御好意に対し厚く御礼申しあげる（標本は総て現在田中氏が保管）。

○ チビサクラコガネ Anomala schönfeldti Ohaus, 1915

本種はサクラコガネを小型にしたような大変きれいな種である。分布も本州，九州，朝鮮が知られていて伊豆諸島にも産する。尚その内の三宅島には亜種miyakensis Nomura, 1967が知られている。

東海地方では成虫の発生のピークは6月中旬〜7月中旬と8月上旬〜中旬の2回で成虫は群飛した後芝草に降りて交尾，産卵し，幼虫越冬とのことである（芝生の病虫害と雑草，1979）。

兵庫県下からの記録は今迄筆者が六甲山で採集した1♂（20－V1－1948）だけでその後全く見出せなく分布に就いて疑問に思っていたのであるが今回田中氏は須磨の燈火に飛来した1♂を採集され（20－1V－1982），本種の分布が再確認された。かって大阪の千里で5月に電燈に多く飛来すると云って2♂♂（18－V－1972）を地元の方に頂いたことがある。電燈に飛来するケースが多いようであるが東海地方の成虫の出現期よりこのあたりは早いようである。この時期にもっと注意したらいるのではないだろうか。芝草を食害してゴルフ場などで問題になっているケースがあるようである。

○ オオチャイロハナムグリ Osmoderma opicum Lewis, 1887

本種が摩耶山で採集出来た，いや採集されていないと大いに話題になったのは戦前であるがとうとうこの摩耶山からの記録は正式には出ないまゝに現在に致っている。戦後中条博士から住吉で1♀が採集出来ていると云う御教示を頂いた（1♀，22－V111－1954）。これが神戸市に於ける唯一の記録である（この件に就いては1981年に若干報告した。てんとうむし，№7，P.25)。摩耶山は杉が多いことからこの種の棲息の希望も全く無いわけではないが何分にも最近の様な急激な開発で自然環境は極度に悪化してまず絶望的と考えていたのであるが今回前の中条博士の住吉と住吉川をへだてゝ東側の岡本の道路の側溝を歩るいていたものを採集したとその新鮮な標本を見せられて驚くと共にまだこの種がいるのだと喜んでいる（1♂，16－V111－1976，M. Tanaka leg.）。やはり注意しなくてはいけないと痛感している。

○ ホソコハナムグリ Glycyphana tonkinensis viridis Sawada, 1942

本種は沢田玄正博士が台湾産で G. gracilis Sawada として新種記載された時日本に産するものは亜種 viridis Sawada として記載された（Zool. Mag., Vol. 54, №6, P.241－242, 1942）。原産地は奈良，土佐，鹿児島である。現在はトンキンが原産の G. tonkiensis Moser（Deutsche Ent. Zeitschr. 1914, P.594 ）の台湾亜種，日本亜種として夫々取扱れている（小林，昆虫と自然，Vol. 15, №2, 1980）。

近畿地方の西部，四国，九州，屋久島に分布しているが兵庫県からは全く記録されていなかった種である。

筆者の手許には奈良春日山産2♂，1♀（17－V1－1957，23－V1－1959，28－V1－1959，芝田太一氏採集），鹿児島県佐多岬産1♂ 1♀（18－V－1959，三宅義一氏採集），鹿児島市城山産1♂，2♀♀（15－V1－1953，加治木氏採集）の標本がある。体長は全部11〜12㎜である。

九州産のものは腹面両側は白斑が多くあり、やゝ緑色を呈する。でも佐多岬産の１♂は腹面の白斑がほとんど無い。奈良県春日山産は腹面黒褐色で白斑をほとんど欠く。共に表面に白紋もほとんどない。

この兵庫県産のものは体長１１㎜，表面には白紋をほとんど欠く。前胸背の側縁中央から前方，特に前縁角付近に白黄色に縁取られ，腹面黒色を呈する。即ち奈良春日山産に大変よく似ている。今回田中氏は神戸市内の太山寺でシイの樹より割って取り出されたものでこの個体以外に見当らなかったとのことであった（１♂，２５－１Ｖ－１９８２）。本種が神戸市内にいることがわかったことは大変うれしい。

以上３種のコガネムシは神戸市，兵庫県下では大変珍しい種であるが他にも田中氏が持参された神戸産のコガネムシには次のように割合少い種がふくまれていた。ハラゲビロウドコガネ，神戸市太山寺産，１♂，１♀，２０－１Ｖ－１９８２，須磨，１♀，２０－１Ｖ－１９８２。ナラノチャイロコガネ，神戸市太山寺，１ex.，２５－１Ｖ－１９８２（カエデより）。ヨツバクロチャイロコガネ，太山寺産，１♀，２０－１Ｖ－１９８２。ヒラタチャイロコガネ，太山寺，２♀，２０－１Ｖ－１９８２。尚最近神戸市内からほとんど姿を消してしまったし，採集の記録の無いキヨウトアオハナムグリの１♀が太山寺で採集されていた（２３－Ｖ１－１９８２）。またこの種を蜂谷氏も須磨で採集され（１♂　９－Ｖ１１－１９８２）御恵与下さった。

○　兵庫県より新に記録されるコガネムシ２種について。

仲田元亮氏が１９８２年１２月に〝増補改訂　能勢の昆虫，甲虫の部，上・下巻〟を自刊されたがその中で上巻，P.259，339−13，ヒゲブトハナムグリ，川西市笹部産（５－Ｖ－１９７３）。P.289，371−45，オオサカスジコガネ，川西市東畦野一の鳥居〜東能勢吉川（妙見口駅）産(21－Ｖ１－１９６４）と記録されている２種は兵庫県下からの記録としては始めてのように思はれるのでこの２種に就いて若干説明しておき度い。

1.　ヒゲブトハナムグリ

本種はLewisにより１８９５年にHonshu産でAnthypna pectinataとして記載された（Ann. Mag. Nat. Hist.，(6) xvl，P.388，1895）が１９３８年にChapinがこの亜科の検討をされた時本種をAnthypna属からAmphicoma　属に移されその後沢田博士（１９５０），野村氏（１９５９）等によりその様に扱はれ現在までAmphicoma属が用いられて来た。最近になって小林裕和氏はChapinの論文を検討されてLewisが始めに記載した時に使用したAnthypna属とすべきであるとの考えを示しておられる（月刊むし，No.141，143，1982）。一方三宅義一氏は琉球産オオヒゲブトハナムグの体色の変化に言及されいくらかの型があるとされ，従来のタイワンヒゲブトハナムグに加えて新に台湾産の新種記載もしておられる。但し之等の総て属Amphicomaとして取扱っておら

れる（北九州の昆虫，Vol. 29, No.3，１９８２）。

本種は関東地域には比較的多くいるようで新島・木下両博士の論文でも東京産２♂で図説され（１９２３），加藤正世，久次米正雄両氏が始めて本種の♀を図説されたがその当時の産出状況も関東地方にだけの様に報じておられる（昆虫界，Vol. 4，No.25，１９３６）。

本種が関西地方に分布している状況は所有文献が貧弱なので筆者は余り良く知らない。分布が本州，四国となっているから多分少いながらも産地はあると考えられる。たゞ兵庫県下のみを眺めた場合本種が確実に産するとした文献は見当らなかった。たゞ八幡英夫氏が"日本産ヒゲブトハナムグリ亜科に就いて"（関西昆虫学会々報，Vol. 12，No.1，1942）なる論文の中で本種の産地を"Osaka, Near, Hyogo"としておられる。これが何を意味しているのか戦前八幡氏を存じあげていたゞけに確かめておけばよかったと今でもくやまれる。この記録が本種の少くとも兵庫県に関しては唯一のものであると思はれる（その時の本種の産地も主として関東，中に青森と云うのはあったが関西での産は示されていなかった）。

今回仲田氏は笹部で採集されたことを記録されたわけで本種が兵庫県に確実に分布していることがわかって大変喜んでいる。仲田氏に産出状況を御尋ねした所，笹部の（大和団地のすぐ下）栗林の下草を飛んでいるのを採集したものでこの１頭以外採集しておられないとのことであった。

尚学名は前に記した様にAnthypna pectinata Lewisと扱うべきかと思う。

2. オウサカスジコガネ　Anomala osakana Sawada, 1942

本種は大阪のZyohoku−koen産♂，Hiradate 産♀をタイプとして沢田玄正博士によって記載された種である（Trans. Kansai Ent. Soc., Vol. XII, pt. 1, P.40，１９４２）。

大阪の城北公園には当時割合いたらしく筆者も当時の同公園産２♂♂，１♀を大倉正文氏より頂いている（４−Ｖ１１−１９４３）。現在この地では状況が変っているのでどうなっているのか知らない。比較的産地の報告の少い種である。分布は大図鑑で本州（西部），九州，屋久島となっている。

近年浜松シーサイドゴルフ場に多く発生することが報告され所謂る"芝草を加害するコガネムシ類の研究"が吉田正義・梅村孝志両氏によって発表されていて（静岡大学農学部昆虫学教室特別報告，第４号，１９８１），その中で本種の産出状況も報告されている。また細辻豊二，吉田正義両氏著"原色図鑑，芝生の病虫害と雑草，１９７９"の中にもカラーで図説その生態を発表されている。このことからゴルフ場に本種が発生するとすれば全国で最も多くのゴルフ場を有する兵庫県には当然いるのではないかと考えていた矢先の仲田氏の記録である。恐らく県下の産地は他にもあると考えられる。仲田氏の記録は氏自身の採集でなく山下　晶氏の採集されたものであるので詳しい状況等はわからなかった。